国立歴史民俗博物館外部評価報告書

～ 歴博の共同研究について ～

２００８年3月

国立歴史民俗博物館外部評価委員会

緒　　言

1981（昭和 56）年、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は大学共同利用機関として設置された。この時、二つの大きな選択をした。一つは、21 世紀に向けて日本の歴史と文化に関する総合的研究を推進するための有効な形態として、「博物館」を選択したこと。もう一つは、大学を中心とする全国の研究者と共同して調査研究・情報提供等を進める体制が制度的に確保された「大学共同利用機関」を選択したことである。そこで 2007（平成 19）年３月、新たな基本理念と基本方針を『REKIHAKU The Future of History 歴博のめざすもの』にまとめて、各方面に提示した。すなわち、歴博の最大の特色は、博物館という形態の大学共同利用機関として設置され、学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供という一連の機能を有することにある。さらに博物館という形態を活かした新しい研究スタイル「博物館型研究統合」を提唱することにした。「博物館型研究統合」とは、〈資源〉〈研究〉〈展示〉という三つの要素を有機的に連鎖させ、さらにそれらの要素を国内外の幅広い人々と〈共有・公開〉することによって、博物館という形態を最大限に活かした研究を推進することであるとした。

今回の評価にあたっては、まず歴博の創設当初からの共同研究についてテーマ設定、共同研究員構成、研究会さらには研究成果の総括・発信にいたるまで詳細に評価をお願いいたしました。さらに歴博が新らたに提唱した「博物館型研究統合」にふさわしく〈資源〉〈研究〉〈展示〉が十分に連動して特色のある研究成果を生みだしたかの評価を資料収集・共同研究・企画展示・シンポジウムなどについても重点的に検討していただいた。

今回、評価委員の方々には、貴重な時間をさき、歴博の共同研究をはじめ、各種事業内容について適確な評価を行っていただきました。継続的に学際的研究を実施できる条件を備えている歴博が、その有利な条件を十分に発揮した共同研究と生かし切っていない共同研究があること、共同研究の個別の成果のみでなく、成果の全体的総括の不十分である点などが指摘されている。学際的研究は、多くの専門分野の単なる成果の羅列ではなく、専門領域を越えて、学問的融合から新たな見解を生みだすことができたかの検証の必要性も指摘されている。

いずれにしても、今回の評価を受けて、今後“博物館という形態の大学共同利用機関”の特性を十分に発揮した研究をはじめ各種事業を推進するよう努めてゆく所存である。

あらためて、国立歴史民俗博物館外部評価委員会の方々に心から御礼申し上げたい。

平成 20 年３月

国立歴史民俗博物館長　平 川　　南

目　　次

緒　　言　　国立歴史民俗博物館長　平　川　　南　・・・1

評価対象共同研究リスト　・・・・4

はじめに　　歴博外部評価委員会委員長　田　端　泰　子　・・・7

外部評価委員会委員名簿　・・・8

評価報告

１．「都市」研究　（Ａ－３）　田　端　泰　子　・・9
李　　成　市　・・13

・共同研究「日本における都市生活史の研究　古代・中世をめぐる流通と消費」

２．「基層信仰」研究　（Ａ－６）　谷　口　　貢　・・15

・共同研究「日本における基層信仰の研究
儀礼と芸能における民俗的世界観に関する研究」

・共同研究「日本における基層信仰の研究
生命観－特にヒトと動物との区別認識についての研究－」

・共同研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究
地域社会・文化の様相と基層信仰」

３．企画展示関連　（Ｂ－２）　馬　場　悠　男　・・25

・共同研究「列島内諸文化の相互交流の研究　北部日本における文化交流」

・共同研究「アイヌ文化の成立過程について」

・企画展示「幻の中世都市十三湊－海から見た北の中世－」

・企画展示「北の島の縄文人－海を越えた文化交流－」

４．企画展示・資料収集・シンポジウム関連　（Ｂ－４）　　岡　内　三　眞　・・27
・共同研究「古代荘園絵図と在地社会についての史的研究
－「額田寺伽藍並条理図」の分析－」
・共同研究「古墳時代における伽耶と日本の交流に関する基礎的研究」
・展示プロジェクト研究「装飾古墳の諸問題」
・企画展示「装飾古墳の世界」
・企画展示「荘園絵図とその世界」
・企画展示「歴史を探るサイエンス」
・歴博フォーラム「描かれた荘園の世界」
・歴博フォーラム「装飾古墳の語るもの－古代日本人の心象風景－」

５．企画展示関連　（Ｂ－６）　　鈴　木　三　男　・・29
・特別企画「歴史を探るサイエンス」
・企画展示「水辺と森と縄文人」
・特別展「縄文 VS 弥生」

評価対象共同研究リスト

国立歴史民俗博物館の共同研究について、開館以来長期的に取り組んできた基幹研究を中心とした共同研究（カテゴリＡ）６件、「博物館型研究統合」の理念に基づく、資料収集や展示などと関連した共同研究（カテゴリＢ）６件を提示し、外部評価委員に評価対象を選択していただいた。

カテゴリＡ：「都市」、「基層信仰」研究等に代表される歴博の基幹研究趣旨に沿って長期的に取り組まれてきた共同研究

○「都市」研究　（候補 Ａ－１）

「都市における生活空間の史的研究
中世における地方自治都市、特に守護所・守護城下の研究」

昭和５６～５８年度　　研究代表者：西川孝治（京都大学）

「都市における生活空間の史的研究　古代都市の研究」

昭和５６～６１年度　　研究代表者：岸俊男（京都大学）

〔研究報告８・１０・２０集〕

○「都市」研究　（候補 Ａ－２）

「都市における生活空間の史的研究
都市絵図・都市図の総合的研究－洛中洛外図屏風・江戸図屏風を中心に－」

昭和６１～平成元年度　　研究代表者：塚本學

「都市における生活空間の史的研究　－広場・道と川－」

平成２～４年度　　研究代表者：福田アジオ（広場）・岩井宏實（道と川）

「都市における生活空間の史的研究
都市における交流空間の史的研究－権力表象場と儀礼－」

平成２～４年度　　研究代表者：田中稔

〔研究報告６０・６７・７４集〕

○「都市」研究　（候補 Ａ－３）　　《評価者：田端委員長・李委員》

「日本における都市生活史の研究　古代・中世をめぐる流通と消費」

平成８～１０年度　　研究代表者：櫻井英治（北海道大学）

平成１１～１３年度　　研究代表者：櫻井英治（北海道大学）

〔研究報告９２・１１３集〕

○「都市」研究　（候補 Ａ－４）

「日本における都市生活史の研究
都市の地域特性の形成と展開過程－近世以降の流通と文化を中心に－」

平成８～１０年度　　研究代表者：吉田伸之（東京大学）

平成１１～１３年度　　研究代表者：吉田伸之（東京大学）

〔研究報告１０３・１２４集〕

○「基層信仰」研究　（候補 Ａ－５）

「日本における基層信仰の研究　古代祭祀遺跡に関する基礎的研究」

昭和５６～５８年度　　研究代表者：金関恕（天理大学）

「日本における基層信仰の研究－葬墓制と他界観－」

昭和６１～平成元年度　　研究代表者：山折哲雄

「地域社会における基層信仰の歴史的研究」

平成８～１０年度　　研究代表者：白石太一郎

〔研究報告７・４９・１１２集〕

○「基層信仰」研究　（候補 Ａ－６）　《評価者：谷口委員》

「日本における基層信仰の研究

儀礼と芸能における民俗的世界観に関する研究」

昭和５８～６０年度　　研究代表者：山折哲雄

「日本における基層信仰の研究

生命観－特にヒトと動物との区別認識についての研究－」

平成２～４年度　　研究代表者：塚本學

「地域社会における基層信仰の歴史的研究　地域社会・文化の様相と基層信仰」

平成１１～１３年度　　研究代表者：高橋敏

〔研究報告１５・６１・１１５集〕

カテゴリＢ：近年に実施された共同研究で、研究と資料収集・展示等との関連が明確であり、企画展示の開催、図録等刊行物の発行 、データベース公開、フォーラム・シンポジウムの開催等の成果情報の公開を実施しているもの

○総合展示・企画展示関連　（候補 Ｂ－１）

「歴史における戦争の研究　近現代の兵士の実像」

平成８・９年度　　研究代表者：藤井忠俊（駿河大学）

「歴史における戦争の研究　近現代の兵士の実像Ⅱ」

平成８・９年度　　研究代表者：藤井忠俊（駿河大学）

「近代日本兵士に関する諸問題の研究」

平成１３～１５年度　　研究代表者：一ノ瀬俊也

「佐倉連隊と地域民衆」

平成１４～１６年度　　研究代表者：樋口雄彦

〔研究報告１０１・１０２・１２６・１３１集〕

○企画展示関連　（候補 Ｂ－２）　　《評価者：馬場委員》

「列島内諸文化の相互交流の研究　北部日本における文化交流」

平成３～５年度　　研究代表者：阿部義平

「アイヌ文化の成立過程について」

平成６～８年度　　研究代表者：西本豊弘

〔研究報告６４・８４・８５集〕

企画展示「幻の中世都市十三湊－海から見た北の中世－」図録

企画展示「北の島の縄文人－海を越えた文化交流－」図録

○企画展示関連　（候補 Ｂ－３）

「平田国学の再検討－篤胤・銕胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究－」

平成１５～１７年度　　研究代表者：宮地正人

〔研究報告１２２・１２８集〕

○企画展示・資料収集・シンポジウム関連　（候補 Ｂ－４）　《評価者：岡内委員》

「装飾古墳の諸問題（展示プロジェクト研究）」

平成２～４年度　　研究代表者：白石太一郎

「古代荘園絵図と在地社会についての史的研究

－「額田寺伽藍並条理図」の分析－」

平成６～８年度　　研究代表者：仁藤敦史

「古墳時代における伽耶と日本の交流に関する基礎的研究」

平成４～６年度　　研究代表者：白石太一郎

〔研究報告８０・８８・１１０集〕

企画展示「装飾古墳の世界」図録

企画展示「荘園絵図とその世界」図録

企画展示「歴史を探るサイエンス」図録

歴博フォーラム「描かれた荘園の世界」記録

歴博フォーラム「装飾古墳の語るもの－古代日本人の心象風景－」記録

○データベース公開関連　（候補 Ｂ－５）

「日本出土鏡のデータ集成及びその共同利用に関する基礎的研究」

昭和６３～平成２年度　　研究代表者：白石太一郎

「近世窯業遺跡データ集成」

研究代表者：吉岡康暢

「地域蘭学の総合的研究」

平成１１～１３年度　　研究代表者：青木歳幸（長野県立歴史博物館）

〔研究報告５５・５６・７３・１１６集〕

○企画展示関連　（候補 Ｂ－６）　　《評価者：鈴木委員》

特別企画「歴史を探るサイエンス」図録

企画展示「水辺と森と縄文人」図録

特別展「縄文ｖｓ弥生」図録

国立歴史民俗博物館外部評価報告書
～歴博の共同研究について～

はじめに

本報告書は歴博外部評価委員会のメンバーが、歴博のこれまでの多数の共同研究のうち、各委員に最も関心の深いテーマでの共同研究について、一人一セットずつ担当して評価を試みたものの集合体である。したがって、これまでに歴博が取り組んだすべての共同研究を対象とした評価ではないことをお断りしておく。片寄った評価といえるかもしれないが、一部分を詳しく検討したことで、全体の持つ問題点もクリアーになっているように思うので、評価報告を公開し、今後の共同研究体制の構築に役立てていただきたいと思う。

当初報告書執筆を依頼された時には、箇条書でまとめてほしいとあったが、出揃った報告書は皆大変力の入ったものとなっている。評価理由や基準を明示して詳述されているものも多く、共同研究の代表者や研究分担者にとっては、一字一句思い当るフシがあるものと思う。

全体を通読してみると、およそ以下の点が共通して指摘されていると思われる。第一に共同研究の形態や成果が、研究会を追うごとに整えられ、成果が上がっていることが、各専門分野から指摘されている。第二に、しかし共同研究たるゆえんである統一的な役割分担の呈示とそれが変更される場合の説明が、不足する場合があったことが述べられている。第三に、計画の全体像についての議論があまりなされないままに進行している点の注意喚起があったことも重要であろう。第四に、研究成果を厳しく見極めること、第五に研究者以外の人への成果の還元、第六に国際的情報発信の不足、などが指摘されている。

今後の共同研究体制の組み方、推進の仕方についてコメントがあり、示唆に富む評価報告集となっているので、あえてナマのかたちでお示ししたいと思う。

歴博外部評価委員会
委員長　田　端　泰　子

国立歴史民俗博物館外部評価委員会

委　員　名　簿

（2006.5.1～2008.4.30）

委員長　　田　端　泰　子　（京都橘大学長）

副委員長　岡　内　三　眞　（早稲田大学文学学術院教授）

木　村　茂　光　（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科長）

鈴　木　三　男　（東北大学植物園長）

谷　口　　貢　（二松学舎大学文学部教授）

馬　場　悠　男　（国立科学博物館人類研究部長）

李　　成　市　（早稲田大学文学学術院教授）

古代・中世の都市・流通・消費に関する共同研究についての評価

田　端　泰　子

１．上のテーマでなされた古代・中世部分の共同研究の報告書は

第９２集　　古代・中世の都市をめぐる流通と消費　　２００２年
第１１３集　古代・中世における流通・消費とその場　　２００４年

の２冊である。この報告書をもとに、共同研究で何が解明され、どのような課題が残ったのかを述べることにする。

２．共同研究の第Ｉ期（最初の３年間）は、主たるテーマを都市における消費の特質の解明に置いたとされている。その研究のなかで、労働と価格との関係や労働観も共同研究者には見えはじめたという特徴があったとされる。

共同研究の成果は９２集の諸論文として結実した。

ａ．まず、古代については、長屋王家木簡の分析から、家産経済は都市経済と関係があり、広く外部の雇傭労働に依存していたこと、王家の財源として、米・銭・布などの貨幣が広く用いられたことなどが明らかにされた。

ｂ．平安時代に関する論文としては、緑釉陶器の生産と流通・消費についての論考しか生まれなかったのはさびしい。上記の陶器が出土するのは、猿投窯と平城京・その近郊だけであるという指摘であるが、これが共同研究のテーマである“流通”したものなのか（商品として売られたのか、贈与品なのか）にまで議論は及んでいない。今後さらに解明が待たれるところであろう。

全体として古代末から中世前期にかけての研究が手薄であるので、今後この点も課題として残るものと思う。

ｃ．中世後期については多様な切り口で、消費の分析がなされた。

・寺院や将軍家の儀礼から消費の実態をみようとする田中浩司論文。
・贈答品としての唐物の流通や循環をみた関論文。
・将軍家の贈与や貸与の背景に商慣行があることを明らかにした桜井論文。
・朽木氏の帳簿の分析から、在地領主経済の赤字体質を指摘した湯浅論文。
・東福寺などの宗教勢力と石鍋という煮炊具との関係を推測した鋤柄論文。
・永禄６年ごろ、旅籠制度が整備されていたことを論証した小島論文。
・草戸では、木簡が荷札・メモとして使用され、再生されたことを明らかにした下津間論文、石鍋や木製食膳具の廃棄量から、居住区やモデルチェンジの速度を推測した鈴木論文。

以上の諸論文によって、中世後期の流通や消費の通説はくつがえされたり、疑問視さ

れたりすることとなった。成果は大きかったと考える。
しかし、欲をいえば、中世後期の流通や消費が、全体として、他の時代と比較して、どのような特徴をもっていたのか、を呈示していただきたかった。このような期待をもって、１１３集を読んだ。

３．共同研究の第Ⅱ期の成果は、５章に整備されて呈示された。
第Ⅱ期には、Ⅰ期と異なり、売買や消費が行われる場つまり都市そのものを解明しようとしたとされる。具体的には店舗に注目し、販売単位や価格の季節間格差、サービスなどを文献史学と考古学の両分野から研究したとされる。
また、研究の基盤的データとしてのデータ・ベースの構築の点でも成果が上がった。

ａ．交易・流通の理解

・交易の意味付けに注目した中村論文は、古代には銭貨を得たり、位階を得るための交易つまり「身分動機の交易」が多いが、１１世紀半ば過ぎから、大規模・遠距離交易という中世的交易が出現するとした。
・１５・１６世紀の物流の変化の背景を、陶磁器や土師器の量、港港の変遷などから探った尾野論文は、変化の背景にあったのが、地震の影響だけではないことを明らかにしている。

ｂ．物価と消費

・桜井論文では、大徳寺や東寺が油を購入するさい、季節や場所による価格の変動を考慮したこと、「理潤」を追求することは合理的だとする観念が存在したこと、中世においては銭の価格が安定していたため、賃金は銭で支払われたが、サービスや労働は、商品とは異なる枠組で把握されていたことなど、物価と流通の中世的本質に迫る提言がなされた。
・「連」の用法から、釘のまとまりの規格化、消費や流通の拡大を読みとる山本論文
・入船納帳の「関銭」には、置石４５文と升米（１００分の一税）が含まれており、関銭の変動と物価との関係を研究することが今後の課題だとする藤田論文
以上、三論文が「物価と消費」の章でくくられている。

ｃ．流通・消費の場

・小島論文は、旅籠賃・「昼休」・船賃など、サービスが定額化していたことから、中世後期の需要と供給の関係を推定し、交通路や旅行システムが自然発生的に成立していると述べる。
・宇佐美論文は、水上交通は３段階を踏んで発展したとみ、近世の全国的水上交通網への連続を説いている。
・「ミセ」から「店」への語の変化を意味の変化（棚の意から建物内部を指す語へ）ととらえたのが後藤論文である。

ｄ．貨幣をめぐって

・古代においては、まず貴族の家政機関で、ついで官司で貨幣出挙が行われ、家政機関に属する人々は出挙銭を借りることで、本主との間に債務関係を有していたのではないかと推測するのが三上論文である。

・中島論文は、京都では１５６０年代に金から銀への交代がおこり、７０年代には銀が送金・贈答の主流になった。そして永禄１２年が銭・金・銀三貨システムの出発点であるという説を呈示した。

・田中論文はこれに対して、大徳寺の帳簿を史料として分析し、１６世紀後半の京都における金・銀・米・銭の流通と機能について、米には凡用性があるが、金・銀はむしろ従の位置にあったとみている。

・中島氏、田中氏の研究にも触れられている浦長瀬氏・盛本氏の見解は、これらとは異なっている。浦長瀬氏は１５７０年以後、銀にかわって米が中心となり、金も登場するが、８０年代以後再び、銀が登場すると述べる。盛本氏は金・銀がスムーズに流通するようになるのは１５９０年代のことであるとする。

・したがって貨幣流通については、さらなる研究がつみ重ねられる必要があると感じる。短く時期区分しつつ、都市間での流通量の差をも考慮する必要があろう。また帳簿類の検討という、この共同研究において新しく提起された研究方法をさらに拡大する必要性も感じる。また、帳簿類の検討にさいしては、交換される品目により、貨幣が使い分けられている可能性もあるのではないかと思う。まだまだ今後の展開が楽しみな研究分野であると思われる。

ｅ．家政と生産

・仁藤論文は、長屋王家には２系統の家政機関、三つの宮があり、５０００戸の封戸という隔絶した多さは、「壬申年功」によるものであるとした。王家では倉に収納された古稲を周辺農民に出挙していたが、長屋王の変により「御田」が収公され、そしてこれが口分田として配分されたことによって、律令制が充実したものになったとみる。家政段階から律令制の土地制度への変化を見通した論考である。

・杉山論文は、飛鳥時代から奈良時代にかけての金属器生産の工房の変化から、平城京内の小規模宅地工房の工人は、官へも貴族邸内の家政機関の工房へも出仕したと結論づける。

・山川論文は、カワラケ（土器）座が扱う品目が複数あったことから、座とは生産組織でなく、商品管理組織であるとしている。

共同研究についての評価

１．個別論文として報告書に掲載された論考には、論文として充分に考察されたことがうかがえるものと、研究ノート的なデータ整理の延長上にあるものが混在している。特に２００２年の報告書についてはこの感が強い。

２．２００２年の報告書に比べて２００４年の報告書は、内容が一段と充実した。その理

由は、共同研究がつみ重ねられたことで、論点が明確になり、またそれに対する答えを共同研究者全体で見出そうとしたことのあらわれであろう。

３．この都市・流通・消費に関する共同研究によって、古代の雇用労働と中世の雇用労働を比較する糸口が開けたこと、中世の物価変動の実態が明らかになりはじめ、またそれに対して中世の人々がどう対処していたか、対処の背景にある観念などが明らかにされはじめた。新しいかたちでの都市や流通研究の道筋が示された、画期的試みであったといえよう。

４．新しい試みとして動きはじめたが故に、この共同研究のなかで新たな課題が多数生まれている。前述の中世後期の貨幣流通を物価との関係でどうとらえるべきか、という問題などはその一例である。今後この分野でさらなる共同研究がはじまる時の指標となるのが、今回の共同研究であろう。今回の共同研究を引きつぐような共同研究が、再開されることを望みたい。

５．共同研究に併行して、「古代・中世都市生活史（物価）データ・ベース」が作成され、平成１６年７月に公開されたことは、本共同研究の大きな成果の一つである。関係者の努力に敬意を表したい。

付随的コメント

１．歴博のテーマ設定については、共同研究については当を得たものであると評価する。ただし、今回の共同研究についても一部あらわれていたが、ある時代に片寄るということのないように、できるだけ古代から中世全般を見通せるような、研究者の組織化を考えてもらいたい。

２．「学際的」に「長期的」に、共同研究ができるのは、歴博の共同研究の強みであるので、歴史学、考古学、民俗学を中心に、多くの研究者が共同研究に参加できる“しくみ”を探求していただきたい。例えば定例の研究会には出席できないが、シンポジウムに参加して意見を述べ、それを論文の形で反映させられるルートをつくる、なども考えられるのではないか。

３．大学ＣＯＥなどの共同研究は、どうしても異分野、異なった時代を越えて通時代的に、などにまで及ばないのが実情である。費用ワクの問題もある。その点、歴博の共同研究は有利な面を持っているので、ＣＯＥなどとの差違を明確にして、歴博独自の共同研究を前進させてほしいと思う。

「日本における都市生活史の研究　古代・中世をめぐる流通と消費」

平成８年～１０年度　平成１１～１３年度
研究報告９２・１１３集

李　　成　市

（１）本共同研究において古代・中世の都市生活、あるいは古代・中世社会を理解する手がかりとして、物価や消費に着目し、都市生活の理解を深めるという課題は、決して容易でない課題でありながらも、報告書の成果を通覧して、そのような課題の有効性と意義を確認することができた。

また報告を通してみる限り、総じて、共同研究の参加者が共通の主題を共有し、鮮明な目的意識のもとに、古代中世の豊富な史料を対象としつつ、それらを分析する新たな視角や、意欲的な方法論が提示され、本格的な議論が展開されていることが認められた。しかも、広く学界においても共有すべき画期的な研究が少なくない。それらの高い水準の研究が、学術雑誌の研究論文では成しえない大部におよぶ学術論文としてまとめられていることも評価に値する。

ただ、報告書を見る限り、冒頭において個々の論文の成果のまとめはなされているが、この共同研究全体の目的と課題設定についての説明は十分とは言いがたい。とりわけ、古代・中世の都市生活、あるいは古代・中世社会を理解する手がかりとして、物価や消費に着目し、都市生活の理解を深めるという課題は意欲的であると認めるが、それだけにその構想について、報告書冒頭において論理的に展開しておく必要があるのではないだろうか。

そのようなことに関わるのかもしれないが、それらの問題設定の構想に基づく全体の成果のまとめがないことは、「共同研究」の報告書としては物足りない。これでは個別研究の集積となっても、「共同研究」としての総合性が見えてこないのではあるまいか。少なくともこれだけの規模の共同研究には、総論および、個別の成果のまとめではないプロジェクト全体の総括が必要であろう。

というのも、かつての大型科学研究費のいわゆる「総合研究」がそうであったように、ある主題の下に、有能な研究者を配して、各々が従事している研究を、研究期間終了後に配列するだのものに終わることになっては、歴史民俗博物館の特色を打ち出せないのではなかろうか。

（２）二冊の報告書を通してみる限り、ここの論文には「学際的研究」への努力が見られ、そのような成果が顕著であると認められる。また、「長期的研究」についても、６年（３＋３年）という比較的長い共同研究期間調査、研究に基づきつつ、今後の学界の潮流に大きな影響を与えるような新たな視角や方法論を提示している個別研究が多く含まれている

ことは評価できる。

（３）共同研究の拠点を歴史民俗博物館に置きつつ、構成員を広く日本全国から募れることもあり、より専門家集団による共同研究を組織できることがメリットであり、この点は、ＣＯＥが基本的に拠点大学で多くが組織されているのとは大きく異なる。またその成果内容も、近年、刊行されているＣＯＥ関係の組織や報告書と比べるとき、個別研究の内容の充実度において優っていると判断できる。

日本における基層信仰に関する共同研究

―その研究報告についての評価―

谷　口　　貢

今回担当した共同研究の成果報告は次の３点である。

⑴　共同研究「儀礼・芸能と民俗的世界観」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第１５集、１９８７年3月）

⑵　共同研究「生命観―とくにヒトと動物との区別認識についての研究―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第６１集、１９９５年1月）

⑶　共同研究「地域社会・文化の諸相と基層信仰―大原幽学と東総村落社会」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第１１５集、２００４年４月）

これらのうち、⑴と⑵は「日本における基層信仰の研究」、⑶は「地域社会における基層信仰の歴史的研究」というという研究プロジェクトの下に実施された共同研究であり、いずれも日本社会における基層信仰の解明に取り組んだ研究成果の報告という共通性をもつものである。

国立歴史博物館の設立主旨の大きな柱の１つである「大学共同利用機関」としての役割から考えると、異なる研究分野の研究者が共通の研究課題に基づいて研究活動を行う共同研究は重要な意義をもつものといえる。

本外部評価の報告では、次の３点に留意して若干の検討を加えることにしたい。

第１は、共同研究の課題設定及び研究計画が適切になされたかどうかという点である。

第２は、共同研究の活動がどのように実行されたのかという点である。

第３は、共同研究の成果報告の内容に関する問題点である。

これらの諸点については、共同研究の実際はどのように展開したのか、第三者にわからない面が多々存することと思われるが、以下の評価はあくまでも各報告書に提示されている範囲のものであることをあらかじめお断りしておきたい。また本外部評価の報告は、担当者の専門である民俗学の立場からの発言が基本となり、各共同研究について個別の検討を行い、最後に全体の総評をまとめることにしたい。

⑴　共同研究「儀礼・芸能と民俗的世界観」

本共同研究の正式名称は「儀礼と芸能における民俗的世界観に関する研究」である。第１５集の巻末に「研究会の記録」が手短にまとめられている。歴博を挙げての大型研究プロジェクトとして「都市における生活空間の史的研究」と「日本における基層信仰の研究」の二本柱を立てて、歴史学、考古学、民俗学の協業を中心に日本の歴史と文化についての追究がなされ、本共同研究は後者の「基層信仰」に関する共同研究として位置づけられて

いるものである。この「基層信仰」は、さらに考古学を中心とする「古代祭祀遺跡」の研究と、民俗学・宗教学・人類学を中心とする「儀礼と芸能における民俗的世界観」の研究とに分けられ、本共同研究は後者に属するものである。両者の総合という問題は今後の課題とされている。共同研究の実施期間は、１９８１年度から１８８５年度までの５年間である。

さて、共同研究「儀礼と芸能における民俗的世界観」は、研究上の視点として「世界観」、「心意的世界」、「社会構造」、「歴史的世界」という４つの枠組みを掲げて行われたとされる。民俗学において儀礼の研究は、主として通過儀礼に焦点が当てられてきたのを踏まえて、初年度は「通過儀礼」の問題にしぼって研究をスタートさせたようである。しかし、民俗学の通過儀礼研究は「人間行動の原初的な意味やその多様な発現形態に注目することが乏しかった」のではないかという反省から、第２年度以降は芸能史研究の視点を導入することにして軌道修正をはかったという。それによって、「芸能」を通して「儀礼」の構造を追究するとともに、「儀礼」の舞台を媒介にして「芸能」の深層を探るという研究の方向づけがなされ、複数の学問領域の協業が軌道に乗ったようである。本共同研究を推進した研究会のメンバーは、研究代表者の山折哲雄氏（宗教学）をはじめ民俗学３名、人類学４名、芸能史３名であり、いずれも「民俗」や「民俗社会」に強い関心をもって研究を進めている研究者で構成されているのが特徴であるといえる。

「研究会の記録」をみると、１９８１年度に八丈島調査、三宅島調査、１９８２年度に上鴨川住吉神社神事舞の調査、１９８５年度に春日若宮御祭の現地調査、という４回の共同調査が実施された記載があるが、これらの共同調査によって得られた知見や深められた認識などについて言及があってもよかったのではないかと思われる。また、共同調査の成果を研究報告に直接反映させているのは、山折氏の春日若宮御祭に論及した論文「秘仏と神」のみにとどまっている点が惜しまれる。

第１５集に掲載されている論文は８本である。個々の論文はそれぞれ興味深いテーマに取り組んでいて一定の水準をもつものであるが、これらを共同研究の成果報告としてながめると、残念ながらまとまりに欠けているといわざるをえない。このことは、研究の枠組として掲げた世界観・心意的世界・社会構造・歴史的世界について、相互の関連性や役割分担を参加者が共通した認識をもって研究にあたることができたのかどうかという疑問が生じるところでもある。さらに、本共同研究が「日本における基層信仰の研究」のサブテーマの１つであることを考えれば、「基層信仰」について十分議論されていないようにも思われる。その上、考古学分野の共同研究「古代の祭祀と信仰」との総合という問題をどこまで視野に入れていたのかという疑問もわいてこざるをえない。

しかし、各研究者のその後の研究の展開をみると本報告書掲載の個別論文はそれぞれ重要な意義をもつものであったといえる。こうした点を考慮して掲載論文に若干のコメントを付すと、次の通りである。新谷尚紀氏の「人と烏のフォークロア」は神々の誕生についてケガレ・ハラヘ・カミの関係について独自の考察を試みたもので、人々がケガレをハラヘヤルことによってカミが発生するという民俗心意のメカニズムついての問題提起を行っ

ている。この後、新谷氏は『ケガレからカミへ』（木耳社、１９８７）へと発展させている。山口昌男氏の「相撲における儀礼と宇宙観」は、相撲のコスモロジーを論じたもので、人類学的視点の導入によって新たな研究の可能性を示唆している。その後の相撲研究に影響を与え、山口氏自身も『見世物の人類学』（共著、三省堂、１９８３）、『知の即興空間―パフォーマンスとしての文化―』等に展開させている。宮田登氏の「日知りの儀礼」は、王権の民俗的基盤を論じたもので、後に『日和見―日本王権論の試み―』（平凡社、１９９２）へと発展させている。守屋毅氏の「近世の都市生活と風流の展開」は、中世の都市祭礼の中で形成された「風流（ふりゅう）」が近世においてどのように継承され、いかなる展開をとげたのかについて考察したもので、『近世芸能興行史の研究』（弘文堂、１９８５）を発展させた研究である。山折哲雄氏の「秘仏と神」は、冬祭としての春日若宮の御祭と、春祭としての二月堂の修二会とを比較対照することによって、祭の本質を浮かび上がらせようと試みたものである。山折氏は、後に「秘仏」の問題を神仏関係の解明へと展開させて、「見えない神」と「見える仏」として論を展開しており、『神から翁へ』（青土社、１９８９）の問題関心とも連結している。

波平恵美子氏の「新潟県東蒲原郡室谷ムラにおける民俗的世界観」、坪井洋文氏の「芋くらべ祭」、上野和男氏の「近江湖東における宮座の組織と儀礼」は、いずれも精緻なフィールドワークに基づく民俗誌的なモノグラフである。波平氏の論文は、地域の「室谷百かまど」の伝承や山の神信仰等を考察して、「一村落の伝承にみられる世界観」について論じたもので、手堅い調査の手法を用いている。坪井氏の論文は、滋賀県蒲生郡日野町中山で毎年９月に行われる「芋くらべ祭」について、起源神話、祭祀組織、祭祀の準備、儀礼の過程を詳しく調査した記録である。坪井氏は「目的の民俗誌的報告と分析とは将来に公表する所存である」と述べているが、氏の逝去によってその目的が実現されなかったことは大変残念なことであった。しかし、坪井氏が「芋くらべ祭」に取り組んだのは、『イモと日本人』等で問題提起した畑作文化論を検証するという目的があったものといえる。上野和男氏の論文は、近畿地方の村落社会を分析する上において「宮座」は重要な意義をもつ社会組織であるという認識に立って、滋賀県愛知郡愛東町青山（現東近江市）における宮座の事例分析を行っている。近江湖東の宮座を取り上げる意図は、「この地域の宮座には年齢階梯的要素が極めて強く、近江の宮座のひとつの典型をなすのではないかと考えられるからである」としている。

本共同研究に参加したメンバーの顔ぶれをみると、１９８３年から１９８７年にかけて刊行された『日本民俗文化体系』（全１４巻・別巻１、小学館）に執筆している方々が多くみられる。坪井洋文氏や宮田登氏等を中心にして、日本民俗学の新しいかたちを模索していた時期と、偶然のことかもしれないが歴博の共同研究が重なっていたという事実は、現在から振り返ってみると興味深い点である。第１５集が刊行された１９８７年の日本民俗学会の機関誌『日本民俗学』第１７１号（１９８７年８月）の「特集　日本民俗学の研究動向（昭和６０・６１年）」において、大島建彦氏が総論「日本民俗学の現状」の中で、「千葉県佐倉市の歴史民俗博物館は、国立の大学共同研究機関として、情報資料研究・歴史研

究・考古研究・民俗研究の四部にわたって、しだいに着実な研究成果をあげているが、都市における生活空間の研究、日本における基層信仰の研究など、いくつかの部門にわたる共同研究とともに、民俗誌作成の総合研究、日本民俗学方法論の研究というような、民俗研究部のみによる共同研究をも進めている」とし、『国立歴史民俗博物館研究報告』に掲載された民俗学関連の研究報告や、『日本人の民俗的時間認識に関する総合的研究』などの研究報告にふれて、「新しい民俗学の研究に対する、そのスタッフの意欲をうかがうこと」ができると述べている。こうしたことから、発足したばかりの歴博が全国の民俗学の１つの拠点となり、新しい民俗学の中心として発展していくことが大いに期待されていたものといえる。

⑵　共同研究「生命観―とくにヒトと動物との区別認識についての研究―」

本共同研究は「日本における基層信仰の研究」のサブテーマとして設定され、研究代表者の１人の塚本学氏によれば、「日本人の生命観を、とくに動物の生命についての感覚との対比によって検討しようとするのが本共同研究の意図」であるという。研究期間は１９９０年から１９９２年度までの 2 年間であり、研究報告は１９９５年１月刊行の『国立歴史民俗博物館』第６１集に発表されたものである。共同研究員は、研究代表者が塚本学氏(歴史学)と西本豊弘氏（考古学）の２名、さらに歴史学２名、民俗学２名、考古学１名、地理学 1 名、生物学２名、都合１０名のスタッフで構成された。なお研究会ではゲストスピーカーとして人類学１名、民俗学１名、生物学１名が招かれている。

本研究報告の特徴は、研究成果の個別論文の外に研究代表者の１人の塚本学氏によって共同研究の方向性を示す試論が巻頭に掲載され、さらに「研究発表・討論要約」と研究報告論文提出後に行われた討論の記録「総合討論―共同研究「生命観」について」が巻末に附篇として収載されていることである。これらによって、この共同研究に取り組む塚本学氏と共同研究員の意気込みと熱意がうかがわれる。

塚本氏は巻頭論文「基層文化への関心とこの共同研究―文字資料をあつかう者の立場から―」で、「基層信仰の研究という視点に応じて動物生命観という課題を設定したことの意図を示すには、基層的な文化としてなにを意識するかについて、この共同研究の主唱者のひとりとしての私見を提示」するという立場から、「基層文化」の考え方について論じている。塚本氏は、基層的な文化という概念を時間系列の中でとらえて、より古い層ほど基層的な文化であるという立場をとらないで、「人間の本源的な生とその生きる自然環境に大きくかかわるものとしてとらえるべき」ではないかとする。そして、「ヒト集団としての共通のルールないし社会的合意の形成は、時間・空間の差をふくんでどの集団にもみられ」るものであり、「そうしたルールにあたるものを、文化の基層的な面としてとらえるべきではなかろうか」とし、「ヒトの生物としての生き方にあって、出生以下の諸過程での社会的ルールに時代的な変遷があるのは当然である」と述べている。また、「文字文化の外にあった民衆が、生活経験によって知り伝承してきた知識を民衆知とよんでみたい」とし、「基層的な文化は、そうした民衆知の存在ぬきでは考えられない」とも述べている。

歴博では「日本における基層信仰の研究」というテーマの下で種々の共同研究が行われてきたが、「基層文化」の概念について研究報告で真正面から検討を試みたのは、おそらく塚本氏がはじめてではないだろうか。民俗学では「基層文化」という概念を用いることに対して、どちらかというと否定的な見解が多く見られるのも確かである。塚本氏は自らを「文字資料をあつかう者の立場」に限定した問題提起であると断っているが、「基層信仰」といった大きな括りを設定している以上、「基層」あるいは「基層文化」の概念をめぐって民俗学の立場からも論議していくことが望まれるものである。

第６１集の個別の研究論文の掲載は１２本である。共同研究のテーマに即して、時代的には縄文・弥生（西本豊弘)、古代・中世（松井章)、中世（原田信男)、近世（塚本学）が押さえられ、そして家畜・野生動物（市川健夫)、水鳥（菅豊)、カタツムリ（野中健一）といった家畜・鳥・巻貝などの人間に身近な動物類をめぐる問題が取り扱われている。海外では遊牧民の牧畜生活（松井健）と定住農牧民（篠原徹）の問題が論じられている。さらに、「生命観」についての議論を深める意図に基づいているものと思われるが、「動物霊」をめぐる問題（千葉徳爾)、精霊としての虫（斎藤慎一郎)、妖怪としての河童伝承（中村禎里）が取り上げられている。以上のように本研究報告の諸論文を整理してみると、共同研究の成果がまとまったかたちで提示されていることが理解できる。しかし、研究報告を利用する第三者（読者）の便を考えると、研究計画の全体像および研究の役割分担についてもう少し分りやすく示してほしいものである。

本共同研究は、動物と人間のかかわりを追究することの重要性と学際的な研究の可能性を示したものとして評価できる。歴博における企画展示「動物とのつきあい―食用から愛玩まで―」（１９９６年3月１９日～５月１９日）が開催され、さらにシンポジウムの記録として『動物と人間の文化誌』（吉川弘文館、１９９７）が刊行されている。また、歴博ブックレットとして塚本学『江戸図屏風の動物たち』（１９９８)、中村禎里『動物妖怪談』（２０００)、松井健『西南アジア遊牧民族記』（２０００）などが出されている。本共同研究への参加者で、その後の研究の展開のうち第１６集に掲載された諸論文のテーマと関連する著書を挙げると、原田信男『歴史のなかの米と肉』（平凡社、１９９３)、塚本学『江戸時代人と動物』（日本エディタースクール出版部、１９９５)、篠原徹『海と山の民俗自然誌』（吉川弘文館、１９９５年)、中村禎里『河童の日本史』（日本エディタースクール出版部、１９９６)、千葉徳爾『狩猟伝承研究・再考篇』（風間書房、１９９７)、松井健『遊牧という文化』（吉川弘文館、２００１)、斎藤慎一郎『蜘蛛』（法政大学出版局、２００２)、野中健一『民族昆虫学』（東京大学出版会、２００５)、菅豊『修験がつくる民俗史』（吉川弘文館、２００６）などがある。

第６１集の構成は「Ⅰ　研究論文」、「Ⅱ　附篇」に分かれており、後者の附篇には「研究発表・討論要約」、「総合討論」、「研究会の記録」が掲載されている。これらを収録した意図は、本共同研究の流れと問題点を示す意図があったのではないかと思われるが、「研究発表・討論要約」は全１２回のうち第２回、第４回、第７回、第１０回、第１１回の５回分が欠落しており、掲載するのであれば全回を掲載するというかたちで徹底してほしいも

のである。また、「総合討論―共同研究「生命観」について―」は、「研究報告の原稿が提出された後に、その内容について、全員で再度議論することを目的」として行われた討論の記録であるという。本共同研究が「生命観」というテーマを掲げながらも、実際は「日本人の動物知識と動物への心意の種々相」という題での共同研究になってしまったのではないかという反省の弁が述べられている。この討論には個別論文ではうかがうことのできない問題点が議論されていて興味深い内容も含まれているが、こうした討論を生のかたちで掲載する必要はなかったのではないかという疑問は残るように思われる。それよりも、討論の中で出された問題点を整理して共同研究の総括がなされていれば、今後の共同研究の在り方に資するところ大であったのではないかと惜しまれる。

⑶　共同研究「地域社会・文化の諸相と基層信仰―大原幽学と東総村落社会」

本共同研究は、基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」という大型プロジェクトの下に「地域社会・文化の諸相と基層信仰」をテーマとして、東日本の千葉県東総地域を対象としたＢ班の研究成果である。歴史学（近世史）の高橋敏氏を研究代表者にして、１９９６年度から２００１年度までの６年間にわたる共同研究である。共同研究員は、研究代表者を含めて１３名で構成され、それに研究協力者が３名参加している。歴史学（近世史、近現代史、教育史）、民俗学、考古学等の諸分野にわたる共同研究である。研究期間は２期に分けられ、第１期は１９９６年度から１９９８年度までの３年間で、フィールドワークを中心にＡ班（西日本の奈良県宇陀郡を中心とする東山中を対象とした研究チーム）を含めて合同で行い、第２期は１９９９年度から２００１年度までの３年間で、Ｂ班独自の研究を実施したとしている。

本共同研究の研究報告が掲載されている第１１６集には、研究代表者の高橋敏氏のよって、巻末に「共同研究の経過と概要」が簡潔にまとめられ、巻頭に「東総地域社会史と大原幽学研究―成果と反省にかえて―」と題して、研究成果の位置づけと個別論文の研究意図について踏み込んだ解説がなされており、研究の経緯と全体像がわかりやすく示されている。研究の目的は、日本人の基層信仰をカミ信仰・祖先信仰・仏教信仰などの特定の要素に分解して理解するのではなく、それらの複合的全体として把握し、各時代の地域社会において実際に機能した基層信仰の実態とその歴史的変遷過程を明らかにすることを目指したとする。そのために、幕末に東総地域を巻き込み一大宗教運動を展開した大原幽学（１７９７～１８５８年）を取り上げ、「大原幽学と東総地域社会の関係史」を主たるねらいにしたという。したがって研究の方向性は、大原幽学の人物像および「性学」という独特の修養団体的な性格の強い教団の解明に止まらず、それらの基盤をなした地域社会の祭祀・芸能・葬制・墓制・村落構造・民衆文化、さらに支配の問題や干鰯・醤油の特産をめぐる産業、これを江戸から全国市場へ搬出する利根川舟運その他の水上・陸上の交通・流通ルートの究明に及んだとしている。第１１５集に掲載されている１４本の論文は、「大原幽学と性学教団」が７本、そして「東総村落社会史」が７本の２部に分けて構成されている

①　大原幽学と性学教団

まず第１部の「大原幽学と性学教団」は、以下のような諸論文である。鈴木映里子氏の「大原幽学の基礎的考察」は、大原幽学に関する原典史料の史料論的考察を行ったものである。松丸明弘氏の「大原幽学と性学門人集団」は、近世後期の東総地域において、「性学」と呼ばれる精神修養的実践と先祖株組合などの経済技術的実践とで農村の改良運動を進めた大原幽学が、６００人以上の門人を短期間に獲得しえた背景には、高弟たちが中心になって作り出した「前夜」という組織が重要な役割をもったことを明らかにしたものである。「前夜」とは事を決定する前夜に相談する会合組織のことである。高橋敏氏の「大原幽学と改心楼の造営」は、性学教団のシンボルとして巨費をかけて建造された「改心楼」が、江戸幕府による幽学弾圧の端緒となり、江戸訴訟の敗北後に幽学は自害し、改心楼は取り壊されるという結末を迎えるが、これらの経緯を克明に追跡したものである。改心楼の建造は、質素倹約を旨とした村落復興の救世主としてのみ幽学を美化できない問題を孕んでいることを示唆している。

栗田則久氏の「香取郡山田町所在性学墓の測量調査報告」は、墓の周囲に土塁を築造し、性学型墓石（台石を三段積み、その上に角錐状の頂部を有する四角柱を載せる形態）の採用、男女を区別した埋葬などの特徴をもつ「性学墓」についての正確な測量と、その実態を調査して報告したものである。米谷博氏の「大原幽学門人の墓について」は、幽学の門人たちの墓が、頭頂を尖らせた墓石、安山岩製の材質、男女別墓域の使用、墓域の土塁囲み、被葬者一人に一基の墓石を建てる、などの諸特徴をもつことを考察し、こうした「性学墓」の成立が幽学生前に始まっていたことを確認できるものの、厳格に規律化されていくのは二代目、三代目の教主の時代であることを明らかにしている。米谷氏の論文で民俗学的に興味深いのは、香取郡・海上郡周辺が両墓制の分布する地域であることに注目して、両墓制の習俗が改変されて男女別墓などの特徴をもつ「性学墓」が創出されたのではないかとしている点である。

朴澤直秀氏の「諸徳寺村永命寺末寺引直し一件」は、幽学により先祖株組合が組織された香取郡諸徳寺村の天台宗の門徒（真宗門徒ではなく寺格の低い寺のこと）から末寺への昇格をめぐって、諸徳寺村と永命寺の本寺である溝原村東栄寺との間に宝永４年（１７０７）に起きた争論で、正徳３年（１７１３）に諸徳寺村の大部分の百姓が、男方が東栄寺、女方が永命寺に帰属する男女別寺檀制をとることで内済が成立した経緯を追跡したものである。そして、周辺地域に男女別寺檀制の慣行がみられることから、争論の関係者が男女別寺檀制の寺檀関係に違和感をもっていなかったことや、新たな男女別寺檀制の創出にあたって意図的に男性を本寺、女性を末寺にするなど、家内において男子を女子より重んじる風が反映していたことを指摘している。

川上順子氏の「叺とカマス」は、千葉県にみられる葬儀において、近隣集団などで行われる互助慣行のカマスズキアイという習俗に注目して、大原幽学の史料にみられる「年頭叺控」との関連性を追究したものである。カマスズキアイとは、近隣集団内に葬儀があるとカマスナカマの家から喪家に手伝いを出すほか、食い扶持としてのカマス米を持ち寄る習俗である。「年頭叺控」とは、幽学の門人が毎年正月に納める叺米および年頭銭の収入記

録であり、これらは性学の活動費や幽学の生活費に当てられたものである。幽学門人の分布地域がカマスズキアイの分布地域とほぼ重なる点などから、カマスズキアイを伝承する門人たちが、カマス米の贈答が発現する場と機能を年頭として「性学」活動の場に移し、幽学を支援するために活用したのではないかとしている。そして、これまでの研究では幽学の指導によって地域の生活習俗が改変された面のみが注目されてきたが、門人たちによって生活習俗が「性学」活動の中に能動的・積極的に活用された面にも注視していく必要があることを主張している。

② 東総村落社会史

第２部の「東総村落社会史」の諸論文は、次のような内容である。後藤雅知氏の「正徳・享保期における下利根川中流域の漁業と村々」は、香取郡佐原・篠原・津宮三か村と他地域・河川関連業者との漁場争論の展開を取り上げて検討を加え、争論によって三か村は村前漁場を確保できたが、他地域の地引網の設置等に対しては干渉できず、享保期以降は不漁に直面し、漁業が衰退化していく経緯を追跡している。安部綾子氏の「銚子における『旅漁師』と『旅商人』の定着過程に関する一考察」は、浄土宗浄国寺（現銚子市春日町）の１７世紀後半から１８世紀初頭にかけての過去帳を検討して、銚子来住者の出身地と来住形態を分析し、さらに来住者の定着過程を追跡したものである。その結果、従来指摘されてきた紀州出身者だけでなく、バラエティに富んだ地域からの多様な来住者がいたことや、多種にわたる生業が営まれていたことを明らかにしている。岩田みゆき氏の「九十九里浜大地曳網漁業地帯における土地移動の実態と性格」は、近世後期以降に大地曳網漁業が展開した九十九里浜沿岸村落における質地金融と、それに伴う土地移動の実態と性格を明らかにしたものである。この地域の天保期頃には、ひとたび大漁があれば、地域全体の生活を潤し、水主や小作人であっても大金がころがりこむような経済状況にあり、一旦質入れした土地でも請返しが可能であったという。従来の水主や小作人のイメージを再考する必要があるのではないかとしている。

木塚久仁子氏の「安政期常陸国土浦町における検地」は、土浦藩において安政２年（１８５５）に藩財政の立直し政策の一環として、町方の反対を押し切って行われた検地を取り上げ、これに関わった３人の人物について考察している。商家に生まれ、国学や度量衡などの研究に励み、検地の不当性を立証しようとした色川三中、この三中の朋友で百姓身分でありながら江戸で測量術や暦学を学び、田制研究が認められて水戸藩に取り立てられて検地の実務を担当した長嶋尉信、そして問屋で町年寄を勤める家に生まれ、待合金騒動で町役人を罷免されて隠居した後、関東取締出役の道案内人として働き、安政２年の検地において長嶋尉信に協力してもう一人の検地の立役者となった内田佐左衛門、という同時期に生きた３人の検地への対応と論理は、領主や家にとらわれることなく、それぞれの生き方と思考を貫いたものであったことを検証している。こうした人物が、すでに幕末の城下町土浦に育まれていたことを注視すべきであると主張している。

川崎史彦氏の「東総地域の教育環境における飲酒」は、明治以前の主として１８世紀前半から１９世紀にかけての東総地域において、飲酒に対する認識の変容を、筆塚の碑文等

を詳細に検討して師弟関係の中でどのような展開をたどったのかを追究している。飲酒に対する態度には、肯定的なものと否定的なものが交錯しているとする。とくに九十九里地域沿岸部では、複数の師匠のもとにいた者のうち、飲酒を忌避する大原幽学の教説に従って、門人が実際に飲酒を止めていく状況がみられるという。また、１９世紀後半に没する師匠についてみると、教え子が筆塚に記述した碑文中に、飲酒を忌避する姿勢がみられるようになっている点も指摘されている。鈴木秀幸氏の「近代日本の教育と青年」は、東総の旧万歳村（現千葉県旭市）で生まれ育った井上勇治郎（１８５１～１８９４）が、幕末維新期における地域構造の変貌と価値観の変化を体験する中で、教育によって地域社会の建て直しと発展を図ろうと尽力した姿を追跡し、さらに彼が招聘した英学教師の石毛辰五郎についても考察している。大原幽学没後の東総村落社会の教育の在り方を究明しようとした研究であるが、「性学」実践運動との関連性については今後の課題とされている。

菅根幸裕氏の「近世・近代の東総における大山信仰」は、東総地域における相模大山信仰の形成と展開について、海上町（現旭市）龍福寺に伝わる宝暦１３年（１７６３）奉納の木太刀銘文等の分析を行い、さらに大山御師の活動を追跡することによって究明している。龍福寺木太刀の銘文から、旧溝原村の「石尊講」に近隣の５０数か村から約１８０人もの参加者がみられることが判明し、この木太刀そのものは「モノマイリ」として、道中安全を龍福寺に祈願し、その成就を感謝して奉納されたものという。大山御師の活動については、御師側の史料である「檀家帳」等によって、近世後期に東総地域において御師の積極的な檀那場開拓の活動が展開されて大山講が形成されたことを明らかにしている。明治維新の神仏分離を迎えると、大山側は大山不動の講（「石尊講」など）を神道に基づく「敬神講」への再編成をはかろうとするが、実際に成功したのは２割程度に止まったという。大山信仰と大原幽学の「性理学」との関連は明確ではないとしながらも、近代以降に神道化した「性理学」と大山信仰の「敬神講」の教義が共振したためか、「性理学」が広がった地域に「敬神講」が形成された点が注目されるとしている。

以上、共同研究「地域社会・文化の諸相と基層信仰―大原幽学と東総村落社会」の研究報告をみてきたが、研究代表者の高橋敏氏が「大原幽学」をキーワードにして緩やかなしばりで全体像を析出することに努めたと述べているように、共同研究の参加者が研究目的を共有して調査研究に従事し、その線に沿って個別論文がまとめ上げられている点は大いに評価できるところである。そうした研究の方向づけと問題意識の共有は、研究報告全体に統一感を与えており、しかも明治大学グループによる東総地域を対象とした研究成果である木村礎編『大原幽学とその周辺』（八木書店、１９８１）等の先行研究をふまえて新たな研究の進展を図ろうとする意気込みが裏づけになっているように思われる。また、「共同研究には千葉県下の博物館、高校等に勤務するいわば地元の若手研究者に参加をお願いした」と述べているように、共同研究が「大学共同利用機関」に止まらず、地域の博物館や郷土資料館等との連携によって進められていることも評価できる点である。

それから、本共同研究では、共同研究によってはじめて切り拓かれる研究が生み出され

ている点も評価しておきたい。例えば、朴澤直秀氏の「諸徳寺村永命寺末寺引直し一件」や川上順子氏の「叺とカマス」、川崎史彦氏の「東総地域の教育環境における飲酒」などに、その一端をみることができる。歴史学や民俗学の枠を越えて、共同研究のテーマと出会うことによって生み出された研究成果であるといえる。

最後に、評者は大原幽学について門外漢なのでわからない点であるが、本研究報告の中で「性学」と「性理学」が用いられているが、統一をとるか、あるいは研究代表者が巻頭の論考で何らかのコメントをつけてほしいものである。それから、本共同研究は「地域社会・文化の諸相と基層信仰」のサブテーマとして位置づけられているものであり、西日本の奈良県宇陀郡を中心とする東山中を対象とした共同研究とどのような関係にあり、今後両者の研究の総合化がどのように図られていくのかの見通しをぜひ示してほしかった。

⑷　全体の総評

この外部評価の報告で担当したのは、日本社会の基層信仰に関する研究報告のうち、第１５集（１９８７年)、第６１集（１９９５年)、第１１５集（２００４年）の３つの共同研究である。いずれも民俗学の立場からみて興味深い研究がなされており、歴博の存在価値を示しているといえる。これまで歴博が行ってきた多くの共同研究と比較検討する必要があるが、上記３つの研究報告をみるかぎり、年代を経るごとに研究成果のまとめ方が整備されてきている（これらのうち編集委員会制度が設けられ、掲載論文の査読が実施されているのは第１１５集のみのようである)。

第１５集の「儀礼・芸能と民俗的世界観」は、歴博開設段階における初期の共同研究であり、共同研究の進め方や研究成果のまとめ方にいろいろと模索の跡がみられる。研究計画の見直しや軌道修正を途中で行ったり、個別論文は一定の水準にありながら、研究報告に全体のまとまりに欠けたりする面がみられるからである。第６１集の「生命―とくにヒトと動物との区別認識についての研究―」は、上記３つの共同研究の中で、対外的にもっとも広がりをもった研究であったといえる。共同研究の成果を外部に向けて積極的にアピールしていくことの重要性を示唆してくれている。第１１５集の「大原幽学と東総村落社会」は、研究の進め方や研究報告のまとめ方に一定の地歩を築いている点が評価できる。

共同研究を進めるにあたっては、参加者が研究のテーマに対する共通認識をもつ必要があり、そうした共通認識を深めていくような研究活動を推進していくことが大切である。共同研究の代表者は研究全体を統括し、リーダーシップを発揮しなくてはならないといえよう。また、共同研究の参加者が自らの専門分野の枠を堅持するだけでなく、共同研究の利点を活かした他分野との協業を目指すように努め、できるだけ共同研究によってはじめて研究の道筋がつけられるような領域を開拓していくことが大いに望まれる。

最後に、本館は民俗学専門の多数の研究スタッフを擁する研究機関であり、全国の民俗学の研究の中核的役割を担うとともに、歴史学や考古学、その他の学問分野との研究交流を行う機関として、今後さらなる発展を遂げていくことを期待している。

以上

国立歴史民俗博物館研究評価

馬　場　悠　男

私は人類学が専門なので、考古学・歴史学・民俗学の内容に関する知識は浅く、判断は見当はずれのことも多いと思われるが、私なりの感想と意見を述べさせていただきたい。

「研究報告」に関しては、第 64・84・85 集を見る限り、報告書としては水準が高いと思われる。まず、一般学術書として読むと、関連分野も含めて精緻な記載と適切な分析論考がなされているように判断できる。さらに、私の専門とする人類学分野の記載分析も含まれているが、非常に水準が高く、それから他の部分の水準の高さも有る程度は推し量ることができる。

考古学あるいは歴史学のトピックに関しては一般の関心も高く、上記研究報告の扱っているテーマは、私のような素人が読んでも楽しいところが多い。第 64 集「青森県一三湊遺跡・福島城跡の研究」では、中世交易都市としての発展の秘密が具体的に解き明かされている。第 84 集「古代における北方交流史の研究」では、渡嶋と蝦夷の認識に関連して、北海道と本州という地域あるいはアイヌと和人の交流に関する解説論考がなされ、大いに勉強になった。第 85 集「浜中 2 遺跡発掘調査報告」では、礼文島という最果ての地でいかに人々が暮らしたかがよくわかり、特にオホーツク文化民の到来と消滅が興味深かった。

これらの報告書が優れたものであることは充分に認識した上で、多少の注文と希望を述べさせていただきたい。一つは、すでになされているとは思うが、これらに関連した一般向けのわかりやすい解説書をたくさん出版していただきたい。報告書は、配布先が限られ、また大部すぎて一般人が読むには時間がかかりすぎる。普通の出版社からでも歴博の叢書のようなものでもよいだろう。

もう一つは、国際発信である。これらの興味深い成果は、日本だけでなく、世界の不特定多数の専門家や一般の人々に理解されるべきであろう。まず、報告書の成果を他の成果と比較研究して、関係する国際雑誌に論文として発表していただきたい。

企画展図録「幻の中世都市一三湊」と「北の島の縄文人」は、表現も易しく、良くできている。特に、「北の島の縄文人」ではイラストが親しみやすさを増して効果的である。問題は、入場者が少ないことであろう。虫の良い提案をさせていただくなら、「縄文 VS 弥生」のような共催共同企画を行ったらいかがだろうか。あるいは、国立歴史民俗博物館で展示をし

た後に、ある程度の変更をして、上野の国立科学博物館で展示を行ったら、国民に有効に還元できるだろう。

国立歴史民俗博物館のテーマ設定・研究水準・先端性に関しては、国内向けでは合格点がつけられるだろう。ただし、国際発信という意味で、世界の人類史・文化史を解明することに貢献できるような研究テーマを設定していただきたい。大げさに言うと、日本の人文科学はブラックホールであり、世界の学問に貢献する情報が出てこない、という批判がある。つまり、釈迦に説法だが、学問・研究が未発達の国では欧米の研究者が入り込んで研究成果を国際発信するが、日本では国内の専門家が閉鎖的研究体制を構築しているので、外国の専門家が入り込む余地がほとんどない。しかも、日本人の研究者は成果を国際発信しないというものである。これは、梅原猛が「いまだに柳田国男の亡霊を引きずっていて検証可能な学問になっていない」と批判することにも一致するだろう。

「学際的研究」や「長期的研究」を行うことは必要であるが、実際に効果があるかどうかが問題である。学際的研究は、多くの専門分野を集めて結果を並べるだけでなく、互いに専門を越えて統合した新しい見解が生まれたかどうかの検証が必要だろう。長期的研究は、博物館としての特性を活かして是非続けていただきたいが、成果を厳しく見極める必要はあるだろう。

ＣＯＥの共同研究は、兼任していた東京大学大学院生物科学専攻で若干の経験があるだけだが、そこでは生物学の最先端研究に博物館的な自然史研究をいかに活かすかが問題となっていた。結果的には、かなり困難で、充分な成果があったとは言えなかった。国立歴史民俗博物館の共同研究では、逆に、最先端的研究をうまく取り入れることによって、研究の活性化ができるのではないか。

以上

歴 民 博 外 部 評 価

岡　内　三　眞

カテゴリーＢ－４（企画展示・資料収集・シンポジウム関連）

展示図録『装飾古墳の世界』千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館を振り出しに、日本各地（四日市市、福岡市、神戸市、宮崎市）を 1993 年 10 月から翌年 9 月までの 12 ヶ月間にわたって巡回した国立歴史民俗博物館開館 10 周年記念企画展の展覧会図録である。期間中の観客動員数はおよそ 15 万人という。15 名の研究者によって分担執筆され、251 ページの大冊である。福岡県王塚装飾古墳の横穴式石室、熊本県千金甲装飾古墳、福岡県五郎山装飾古墳、同竹原古墳、同珍敷塚、茨城県虎塚古墳の横穴式石室と装飾壁画の原寸大復原模型を製作展示しているのは圧巻である。　壁画模写図、カラー写真パネル、77 の装飾古墳、壁画古墳の解説、一覧表、分布図、文献目録で構成されている。展覧期間に合わせた 1993 年 10 月の刊行である。実物大模型の石室を展示するなど迫力満点で、図録からみても用意周到に準備された内容の充実した展覧会であると高く評価できる。

フォーラム記録『装飾古墳が語るもの』1995 年 7 月刊行、1993 年 11 月 2～3 日に、東京有楽町マリオンの朝日ホールで開催した第 15 回歴博フォーラム「装飾古墳が語るもの」の記録である。8 名の基調報告、11 名によるシンポジウムの討論を掲載している。巻頭カラー図版 22 ページ、基調報告 100 ページ、シンポジウム 61 ページの内容である。国立歴史民俗博物館開館 10 周年記念企画展『装飾古墳の世界』に関連したフォーラムで、多数の視聴者が参加した社会に開かれた活動となっている。

研究報告 80「装飾古墳の諸問題」13 人の執筆者による論文を掲載している。「装飾古墳の世界」展示プロジェクトチームによる 1990 年からの 3 年間の現地調査や研究会の研究成果を網羅している。日本考古学、東アジア考古学、日本古代史、東アジア古代史、民俗学、民族学、神話学、宗教学、保存科学の専門家が参加し、「学際的研究」がおこなわれ、学横断的な国際研究の成果が十二分に発揮されている。ただ 1999 年 3 月刊行と出版時期が遅れている点が惜しまれる。

展示図録『荘園絵図とその世界』1993 年 3 月刊行、93 年 3 月 16 日～5 月 16 日まで開催した「企画展示「荘園絵図とその世界」の展示解説図録である。18 点の原本と歴博収集あるいは復原製作の複製品、原本カラー写真、黒白写真、トレース図などで図版を構成している。解説、解題とで 5 名の専門論文をつけている。自然科学的な手法で荘園絵図に取り組み、赤外線やＸ塼写真を用いてデジタル化し、展示からデジタルデータの利用までを視野に入れた斬新な企画と判定できる。紙や布、木簡など有機質の書写歴史資料を活用するひ

とつの方向が示されている。博物館展示も日進月歩の勢いを感じ取れる。

展示図録『歴史を探るサイエンス』2003 年 10 月 21 日から 11 月 30 日までの特別企画「歴史を探るサイエンス」の展示解説図録である。１年代を探る、２素材を探る、３よみがえる江戸図屏風、４デジタルで探るで構成されている。その中に［国宝］「額田寺伽藍並条里図」を赤外線、Ｘ線、通常光で撮影して趙精細デジタル資料とし、復原複製した４種類の写真とで比較し、歴史資料の自在閲覧システムを構築している。博物館や美術館における有機質歴史資料のさらなる深化と展開が期待できる。

フォーラム記録『描かれた荘園の世界』平成 5 年 3 月 16 日～5 月 16 日の 2 ヶ月にわたる『荘園とその世界』企画展に関連した歴博フォーラムとその記録である。開催期間中の 5 月１日に歴博講堂で実施したフォーラムの記録である。3 本の基調報告とシンポジウム、絵図に関連した論文と基調報告と討論にかかわる論文とで構成されている。当初は記録の刊行を予定していなかったが、フォーラムを開催した結果、反響が大きかったので発表内容を充実させて刊行している。企画展示の狙いとコンピューターによるデータの分析と荘園絵図の復原、レプリカの製作と展示方法などについての小論が載せられている。この企画展に対する意気込みと周到な準備を関係者の熱心な討論からも読み取ることができる。

研究報告 88「古代荘園絵図と在地社会についての史的研究」1994 年度から 1996 年度の３年間にわたる研究である。考古学、地理学、古環境、科学分析、絵画技法、建築史、民俗学、古代史、近世史などの分野から研究者が参加した総合プログラムの成果報告である。「額田寺伽藍並条理図」ほか 52 枚のカラー図版、28 枚の白黒写真、10 篇の論文、6 本の資料、1 本の解説、シンポジウムで構成されている。12 回におよぶ研究会の発表や 1997 年 2 月 15 日～16 日のシンポジウムは、深い学識と鋭い批判精神とを目の当たりにできる内容を示している。ただこのメンバーなら学際的な成果をもう少し前面に出しても良かったのではなかろうか。

研究報告 110「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」2004 年 2 月刊行、1992 年度から 3 年間実施した「古墳時代における加耶と日本の交流に関する基礎的研究」とその成果をふまえて 2002 年 3 月 13 日～16 日にかけて開催した第 5 回歴博国際シンポジウムの成果報告である。１加耶の鉄と倭国(7 本、160 ページ)、２騎馬戦用の武器と馬具の受容（6 本、205 ページ）、３考古資料からみた加耶と倭（6 本、172 ページ）、４加耶と倭の交流とその歴史的意義（6 本、148 ページ）の 4 セッションで、それぞれ複数の論文から構成している。1992 年度に開始された研究が 2004 年に成果をだすのでは遅すぎる。その間に多くの新資料や論考が発表されているので、研究期間が長くなるのであれば「長期的研究」を志向して、計画的に進めたほうが良かったのではなかろうか。

歴　博　外　部　評　価

鈴　木　三　男

Ⅰ．　評価対象事業

「歴博における縄文時代・弥生時代の年代研究事業」1995～2006 年度

Ⅱ．　評価対象事業の内容

1995～1997 年度　科学研究費補助金　基盤（C）(2)　「AMS-14C 法による歴史資料年代測定に関する研究」（研究代表者　坂本　稔）

1997～1999 年度　科学研究費補助金　基盤（A）(1)　「ヒノキ・スギ等の年輪年代による炭素 14 年代の修正」（研究代表者　佐原　真）

1998～2001 年度　歴博　研究高度化推進プログラム「縄文時代の高精度編年研究」（研究代表者　今村峯雄）

1999～2000 年度　科学研究費補助金　奨励研究（A）「AMS による古代ウルシの炭素 14 年代測定」（研究代表者　坂本　稔）

2001～2003 年度　科学研究費補助金　基盤（A）(1)　「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（研究代表者　今村峯雄）

2003～2005 年度　歴博　基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表者　今村峯雄）

2004～2008 年度（継続中）　学振科学研究費補助金　学術創成「弥生農耕の起源と東アジア」（研究代表者　西本豊弘）

2006～2008 年度（継続中）　歴博　基盤研究「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」（研究代表者　今村峯雄）

Ⅲ．　評価の視点

１．　歴博の設置目的からの視点

［設置目的］

国立歴史民俗博物館は，大学における学術研究の発展及び資料の公開等一般公衆に対する教育活動の推進に資するための大学共同利用機関として，昭和 56 年 4 月 14 日に設置されたものであり，我が国の歴史資料，考古資料及び民俗資料の収集，保管及び公衆への供覧並びに歴史学，考古学及び民俗学に関する調査研究を行うことを目的としている．

歴博は上記設置目的に沿った種々の研究教育事業を展開している．本評価対象事業は，おもに縄文･弥生時代の植物由来（一部動物由来）の遺物等に含まれる放射性炭素を AMS（加速器質量分析）法で測定してその遺物等の生成年代を知ることにより，縄文・弥生時代の開始・発展・終焉の年代を暦年として確立することにある．これは歴博の設置目的である「我が国の歴史資料，考古資料の収集」の一環としての「年代測定資料（及びそのデータ）の収集」であり，又，その結果を基に我が国の先史時代の歴史年表を従来の相対年代から脱却して暦年で位置づけることにより，我が国を遙かに遡る歴年表を持つ中国の歴史との正しい時間関係を明らかにして「歴史学，考古学および民俗学に関する調査研究」の基盤を形成するものである．そして，それらの結果を正しく歴史年表に位置づけた結果を図書の出版，展示，報道など，様々な手段を用いて公表・公開することは歴博が担うべき収集資料と研究成果の一般公開と市民教育を実践するものである．

【講評】この点に関して，本対象事業においては，以下に詳述するように，1）まず最初に放射性炭素の AMS 年代測定法の正確な適応の為の基盤研究を展開したこと，2）全国の縄文時代・弥生時代の考古学研究者，教育委員会等と連携した研究展開により全国規模で資料・データを収集したこと，3）その最大の成果として弥生時代の開始年代が従来の考古学的手法に基づいて推算されていた数字を大きく書き換えたこと，4）縄文時代および弥生時代の各時期および各地域での時期のずれを暦年として表示する方法を呈示し，実際の年代値をかなりの部分に亘って表示したこと，そして 5）ここに用いられた手法の正当性と得られた結果の妥当性について，研究者及び一般市民の理解を得るための発表・公開・歴博における企画展も含めた広報活動を積極的に行ってきたこと，があげられ，設置目的に正に叶う活動であったと評価できる．

２． 歴博が大学と異なる研究機関であるという視点からの評価

大学は研究とともに高等教育を担うのが最大使命であり，研究と教育の両輪がバランスを持って進行していくことが求められる．一方歴博は研究と公開が両輪として位置づけられており，教育に関しては総合大学院を構成する部分とはなっているがこれはあくまでも副次的な機能であると認識されている．従って，歴博における研究は大学における研究と同等の位置づけにあると言えるが，その研究形態においては大学と同等な部分と独自の部分があり得る．

大学，歴博とも研究者の集団であり，個々の構成員が自由な発想に基づく「個人研究」を展開しており，それはしばしば個人の集合体である共同研究の形を取る．大学においてはそれらの研究成果を教育に活かす努力が常に積み重ねられ高等教育内容の改訂が不断になされる．一方，歴博では資料の収集と研究の成果を展示等の行動を通して社会に還元す

ることが求められ，研究者は直接資料の収集にあたり，その収集資料の研究と展示等を行う為の研究が常に求められている．資料の収集，研究，そして展示という一連の過程は，勿論個々人でなされる部分も多々あるが，物理的，分野的広がりの中で，歴博という組織としての効率の良い展開が求められるのは言うまでもない．つまり，個々人の自由な研究を保障しつつ，組織としてのチームワークがつよく求められるといえる．

【講評】本事業は，歴博自身によるそれまでは異分野とも言える自然科学系研究者の積極的な登用とその研究環境の整備に始まるが，研究自体は「個人研究」の形で始まったと見なしても良い．しかし（主として）考古学系研究者との共同研究，そして歴博としてのプロジェクト研究へと発展する中で，歴博固有の研究資材の投入と自然系・考古系・歴史系各分野の研究代表者がそれぞれの専門分野に重点を置いた科学研究費の獲得などで継続して事業を推進してきた．これは大学では付置研究所や施設等ではあり得ても通常の学部・研究科等では極めて難しいことで，正に歴博だからできた事業と評価されよう．

３．　（国公立の）研究所と異なる研究機関であるという視点からの評価

研究所等での研究は，基本的に研究所が負うべきミッションを基に，そこの組織体制のなかで，部，科，室，あるいは個別課題の応じたプロジェクトチームなどの組織をユニットとして行われるのが基本で，ユニットの中では個々の構成員は共同研究者としてと言うよりもプロジェクトの「パーツ」として行動することを求められると言える．また，課題に応じた長短の別はあるもののユニットはいずれも有期限のものである．歴博においては上記大学との比較において述べられたように個々人の自由な研究を基本にしつつ，組織としてのチームワークで研究を遂行することが求められ，これは勿論課題に応じた有期限のチームもあるが，設置目的である「歴史学，考古学および民俗学に関する資料の収集，保管，公開，調査研究」には期限はあり得ず，恒常的な業務として従事することが求められる．

【講評】前項に述べたように歴博での研究は単一プロジェクトではなく，継続的な，しかも全国的な規模での年代測定資料の収集・研究・公開が基本にあり，研究者自身もそれを職務として従事してきている．これは一つ一つのプロジェクトをこなして行く研究所では長期的に継続して取り組むことは困難であり，正に歴博が担っている目的に叶う事業であると評価される．

Ⅳ．　個別の評価項目と評価内容

１．　研究体制

・歴博内の共同研究体制

歴博における縄文時代・弥生時代の年代研究事業は 1994 年と 1996 年の年代測定を専門とする研究者の情報資料研究部への配置と 1997 年の年代測定資料実験室の新設と周辺機器整備にある．爾来，年代測定資料実験室での主に考古分野からの測定依頼を受ける一方，系統だった年代測定資料の収集をはじめ，その具体的な研究展開は科学研究費補助金基盤研究（C）「AMS-14C 法による歴史資料年代測定に関する研究」（1995-1997）に見ることができる．

この時点では，外形的には「個人研究」と見なされるが，館内での共同研究の機運が醸成されたようで，1997 年には館長を研究代表者と科学研究費補助金基盤研究（A）「ヒノキ・スギ等の年輪年代による炭素 14 年代の修正」（1997-1999）が実施に移された．これは考古学分野が館長の他 1 名，自然科学分野が 2 名，それに年輪年代学と年代測定を専門とする外部の研究者各 1 名で構成され，館内の考古学-自然科学の共同研究体制が確立し，それを歴博として推進する方向を打ち出したものと受け止めることが出来る．それはこの科学研究費プロジェクトと並行して歴博の経費を充てた研究高度化推進プログラム「縄文時代の高精度編年研究」（1998-2001）が推進され，それが科学研究費補助金基盤研究（A）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（2001-2003）へと受け継がれ，科学研究費補助金学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」」（2004-2008）と言う形で外部資金を導入し，それらの活動を補完し，又継承する形で同時進行的に歴博の連続した二つの基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（2003-2005），「歴史資料研究における年代測定の活用法に関する総合的研究」（2006-2008）が推進されてきている．この間，歴博の情報資料研究系・考古研究系・歴史研究系の間で強固な共同研究体制が組まれ，チームワークとして着実な成果を挙げてきており，十分評価できる．

・歴博外との共同研究体制

前項の一連の研究推進過程においては，恒常的に歴博外の研究者の参画がなされてきている．本事業に関する共同研究者はその性格から大きく二つのグループに分かれる．一つは本館内の研究者と基本的に同じ職責を負う外部の研究者で，その専門性において歴博のメンバーに欠けた分野を補完する意味合いを持っている．その主たるものとして名古屋大学年代測定資料研究センターの中村俊夫氏，奈良文化財研究所の光谷拓実氏（年輪年代学）らがあげられよう．一方，第二のグループでは，個々の遺跡や歴史資料において，遺物・資料を検討して最適の年代測定資料を選別し，又測定した結果の解釈において考古学的，歴史学的検討を歴博研究者と共に行う全国の多数の研究者である．第一のグループとの共同研究は「共同研究」と名がつく全ての研究において当然のことであるが，第二のグループとの共同化は歴博という組織であるからこそ比較的円滑に進

められてきたことは間違いなく，この点でもこれまで構築されてきた共同研究のシステムは評価されて良い．

２． 研究の企画，立案，実行とその成果

本事業の最も大きな特徴は加速器を用いた年代測定をその中心に据えながら，歴博が加速器を持たないことである．技術の進歩もあって放射性炭素年代測定に特化した加速器及び周辺装置群は以前より安価に設置できるとはいえ，その金額は歴博の予算規模からして，又，これまで歴博メンバーが獲得してきた科学研究費等の外部資金から見ても決して小さいものではない．更に，これらの設備の導入は，恒常的維持費と維持・測定をする為の人手を必要とし，その総額が大きくなる為，常に充分な稼働を要求されることになる．本事業はその初期においてそこまで全てを見通して発足したわけではないと考えられるが，加速器を持たずに年代測定を行うという形で，極めて賢明な方向を選んだ先見の明がある．

そして，導入された経費を試料の調整と測定の外部委託に集中することにより機械を購入し維持するよりも遙かに多くの測定が可能となった．このような方向から次の点が具体的な成果としてあがってきた．

1）多くの試料を測定する経験を積むことより，どのような試料（とくに土器付着炭化物）をどのような処理で測定すれば安定した（つまりかなり真実に近付いた）結果が得られるかを理解し，マニュアル化するとともに，方法論についての情報開示と公開的討論を積極的に行い，考古研究者に根強くあった「C14 測定不信」をかなりの程度に亘って払拭した．（特に海洋リザーバー効果など）

2）Intcal98，Intcal04 に依拠して暦年補正を徹底的にやることにより放射性炭素による年代測定が土器などによる考古編年と決して矛盾しないことを明らかにし，さらに「2000 年問題」を考古編年と測定結果との慎重かつ精緻な突き合わせ，年輪年代の結果を援用することにより，ほとんど解決した．

3）これらの結果から，弥生時代を水田稲作と定義した場合の弥生時代開始時期を従来の考古学的編年（相対年代）による見積もり値から大幅に遡った年代を提案した．これは弥生の開始時期のみに関わることではなく，縄文時代の年代観，縄文・弥生の各時期の開始と終わりの年代，年代の地域差など全てにわたって書き換えたものである．これにより，大陸，特に中国と日本との関係を根本的に見直した歴史観の創成が求められることになった．

本事業の成果は以上に留まらないが，12 年間にわたる研究事業として多大な成果を挙げてきたと評価されるべきである．

３． 外部資金導入

本研究の事業費は歴博独自の予算と外部資金により手当てされており，外部資金の主たるものは文部科学省（及び学術振興会）による科学研究費補助金である．この 12 年間で，歴博メンバーが研究代表者で直接的に年代測定事業を標榜した科学研究費は学術創成 1 件（5 年間），基盤研究（A）2 件（各 3 年間），基盤研究（B）1 件（2 年間），基盤研究（C）が 2 件（3 年間と 2 年間），奨励研究（A）が 1 件（2 年間）である．これらの研究年度を繋ぐと 1995 年以来ほとんど毎年誰かが代表となって科学研究費を獲得し（平成 18 年度までで直接経費の総額が 37,210 万円），それは成果が順次上がると共に規模が大きくなっており，研究事業の展開を大きく支えてきており，今後の更なる発展が期待できる．

４． 研究成果の公開，普及

本事業に関連した研究成果は，1）歴博の刊行物（年報，研究報告，展示図録），2）歴博の研究及び公開シンポジウム等の開催，3）歴博の企画展開催，4）科学研究費等の研究成果報告書，5）学術創成研究ニュースレター「弥生農耕の起源と東アジア」，6）関連諸学会，研究会，シンポジウムなどでの発表，7）各種学術雑誌，8）各地の遺跡発掘調査報告書等，9）専門書による研究成果の発表，10）一般書による市民への公表，など実に多岐にわたり，又非常に多くの報告がなされている．これらについては全てを把握して評価資料とすることはできなかったが，把握した範囲では次の通りである．

1）歴博の刊行物

歴博の刊行物には歴博の運営状況を示すもの（年報など），学術的研究成果を公表するもの（国立歴史民俗博物館研究報告等），研究成果を広く一般に広報するもの（歴博など），企画展，特別展等の展示内容を一般に解説するもの（展示図録），歴博フォーラムなどのシンポジウム等の内容を公表するもの，などがある．ここでは今挙げた順番におよそ配列して本事業に関連した成果として発表されたものを取り上げた．

【年報】歴博は「国立歴史民俗博物館年報」を 2004 年度に第 1 号を発行し，現在 2005 年度（第 2 号）まである．この中に本事業関連の記事として，歴博基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」について，また外部資金の項には科学研究費補助金学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」等の報告がある．また，同年報には教員個人毎の研究活動及び業績目録があり，それぞれ本事業参画者の項において研究成果等の記述がなされている．

【国立歴史民俗博物館研究報告】歴博の研究紀要に当たる出版物で，編集委員会による査読があり，又英文の要旨もついていて学術雑誌として一応の評価を受けているものである．特にここ数年は年間数冊ずつ発行され，そのボリュームはかなり大きなものとなっている．

研究プロジェクトをまとめた特集的な号が多いが，さまざまな分野の論文を集めた号や資料掲載を中心とした号などバラエティに富んでいる．本事業関連で特集を組んだ号は特になく，本事業関連であると容易に認められる論文には次のようなものがあり，その数は発行されている総量に比べると大変少ない．これは何も本事業のアクティビティが低いことを示しているのではなく，本事業関連ではむしろ歴博研究報告以外の雑誌，書籍等に多くの報告がなされているからと認められる．

第 108 集（2003.3）

今村峯雄「高精度年代測定による総合的歴史研究」

第 120 集（2004.3）

小林謙一・今村峯雄・坂本稔「東信・北関東地方の中期中葉土器群の編年的・年代的位置付け」

第 133 集（2006.12）

小林謙一「縄紋時代研究における炭素 14 年代測定」

坂本稔・春成秀爾・小林謙一「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生中期木棺の年代 」

藤尾慎一郎・今村峯雄「弥生時代中期の実年代」

【国立歴史民俗博物館研究業績集】「炭素 14 年代測定と考古学」 （370 頁）が 2003 年 10 月に刊行された．これは本事業関連の成果を，Ⅰ弥生時代の開始年代，Ⅱ炭素 14 年代測定の方法，Ⅲ炭素 14 年代測定の研究成果，Ⅳ炭素 14 年代の測定，の 4 部について本事業参画の館内及び館外の研究者が諸学会や他の刊行物，遺跡調査報告書等で発表した研究成果を再録したもので，いわばこの時点までの本事業研究成果の集大成となっており，一覧性に優れ，極めて資料価値が高いものである．このようにこれまで挙げてきた成果をきちんとまとめて呈示したことが次の大型科学研究費（学術創成研究）の獲得に繋がったと考えられる．

【歴史研究の最前線】これは総合研究大学院大学の日本歴史研究専攻と国立歴史民俗博物館との共同刊行の形を取っており，その中の第 1 冊目が「揺らぐ考古学の常識-前・中期旧石器捏造問題と弥生開始年代-」とのタイトルで 2004 年 1 月に出されている．この中には弥生時代の開始年代等に関する最新の研究成果が平易に紹介されている．

【歴博】第 120 号（2003 年 9 月 20 日発行）[特集]胎動する歴史学「実年代」弥生時代よどこへゆく，があり，放射性炭素による年代測定法の原理と暦年補正の問題，その結果として，弥生時代の年代をどう考えるべきか，が平易に解説してある．

【企画展示図録】

・歴史を探るサイエンス ，63 頁，2003 年 10 月発行．4 部で構成され，その第 1 部が「年代を探る」で，年代測定法の紹介と「年代が分かると歴史観が変わる」と題した，研究成

果によってどんなことが明らかになったかを簡明に伝えている．

・水辺と森と縄文人，100 頁，2005 年 6 月発行．縄文の低湿地遺跡を主題に取り上げた展示（図録）で，そのなかで「年代を測る」と言う項の中で AMS 法，年輪年代法，漆・土器付着炭化物の測定結果などをとりあげている．

・縄文 VS 弥生，139 頁，2005 年 7 月発行．縄文時代と弥生時代を対比した展示（図録）で，縄文，弥生それぞれの年代観と年代測定法等についての解説がある．

2）歴博の研究及び公開シンポジウム等の開催

・研究報告会「弥生時代の実年代」が 2003 年 12 月 21 日（日），国立歴史民俗博物館で開催された．内容は研究業績集「炭素 14 年代測定と考古学」に収録されているものとだいたい同じと見なされる．

・第 53 回歴博フォーラム「弥生時代はどう変わるか」が 2006 年 3 月 4 日，ヤマハホールで開催された．ここでは歴博の研究者の他さまざまな大学等の研究者からの報告があった．このフォーラムの内容を盛り込んだ書籍の出版があり，下記第 10 項目に記載してある．

3）歴博の企画展開催

本事業の研究成果が目に見える形で取り込まれた企画展示は次の 3 件あり，それらの内容については上記刊行物の中の「企画展示図録」にある．企画展がどれだけの成果（入館者数，関連企画参加者数等）を挙げたか，またその中で本事業関連の研究成果がどのくらいの働きを担ったか，については情報がないので評価できない．

・特別企画展「歴史を探るサイエンス」2003 年 10 月 21 日（火）～11 月 30 日（日）会場：国立歴史民俗博物館

・企画展「水辺と森と縄文人」2005 年 6 月 14 日（火）～7 月 31 日（日），会場：国立歴史民俗博物館（その後，東北歴史博物館，新潟県立歴史博物館を巡回）

・特別展「縄文 VS 弥生」2005 年 7 月 16 日（土）～8 月 31 日（水），会場：国立科学博物館（国立科学博物館と歴博の共催）

4）科学研究費等の研究成果報告書

それぞれの科学研究費補助金について，それぞれ研究成果報告書が提出されており，それらには，年代測定結果が掲載されると共に成果発表されたものについて再録されており，資料価値が高い．

5）学術創成研究ニュースレター「弥生農耕の起源と東アジア」

これは平成 16 年度（2004）から始まった学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」のニュースレターで，研究者向けに現在の研究の進行状況を逐次公表しているものである．16 年度に第 1 号，17 年度は 2,3 号，18 年度は 4,5,6 号を発行し，現在も続いている．最新のトピックスと高品位の図表があり，高い引用効果が認められる．

6）関連諸学会，研究会，シンポジウムなどでの発表

7）各種学術雑誌

8）各地の遺跡発掘調査報告書等

上記 3 項目に関しては，そもそも本事業参画者の専門分野が多様であることにより，彼らが研究成果を発表する学会，研究会，シンポジウム等は実に多岐にわたり，その全容を把握するのは，外部のものにとっては不可能と言って良い．因みに学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」に関連して取りまとめられた平成 17 年度の業績リストを見ると，研究報告としては，論文 4 編，遺跡調査報告書等 41 編，その他印刷物 3 編，学会発表 15 件，講演等 11 件などである．これらは研究分野での発表であり，数としては充分といえるが，難点は英文論文が無く，情報の国際発信が充分とは言えないところにある．

9）専門書による研究成果の発表

・「新弥生時代のはじまり，第 1 巻．弥生時代の新年代」，西本豊弘（編），143 頁，2006 年 4 月，雄山閣.

・（参考）「新弥生時代のはじまり，第 2 巻．縄文時代から弥生時代へ」，西本豊弘（編），185 頁，2007 年 5 月，雄山閣.

上記のうち，2 冊目は評価対象期間が平成 18 年度までであり，それ以後の出版と言うことから，「参考」としたが，極めて連動した成果発表であるので一括して扱う．第 1 冊目は弥生の新年代を中心に据えて，その年代がどのように測られたのかについての方法論，AMS 測定法の原理，放射性炭素で何を計ることが出来て何が測れないのか，何がデータをゆがませるのか，と言った，本事業の根幹に関わる問題についての検討結果とその解説，そしてそれから実際弥生の開始年代についてどのような値が何処の何から得られるのか，更に，その年代をどのように理解すべきなのか，などについての研究成果をまとめたものである．掲載されている内容の多くは学術雑誌や歴博の出版物等に既に発表されているものがほとんどだが，それらを網羅的ではなく，きちんと系統立てて配列し，本事業研究成果の正当性をきっちりと示したもので，2003 年 10 月に歴博から刊行された，国立歴史民俗博物館研究業績集「炭素 14 年代測定と考古学」 に引き続く内容であり，又，それを補完するものであり，放射性炭素年代測定法への基本理解を得る上で極めて有効な教科書であり，また資料的価値の高いものである．

参考としてあげた第 2 冊目はこれに引き続き，弥生時代の年代の初めばかりでなく，弥生時代の各時期，そして縄文時代の各時期を，地方毎に詳細に検討した成果をまとめ上げており，縄文時代についてはまだまだデータが少なく，全貌を明らかにしたとは言えないが，弥生時代についてはかなり明確な年代観が得られるようになったことをよく示している．

10）一般書による市民への公表

広瀬和雄（編）「弥生時代はどう変わるか」210 頁,学生社（2007 年 3 月）が刊行されている．上に述べてあるように第 53 回歴博フォーラム（2006.3 開催）の登壇者の発表内容を基とし，そこに適宜他の研究者によるコラムを加え，また，総合討論（シンポジウム）も掲載している．この中で，本事業研究成果自身は大きなボリュームを占めているわけではないが，その基礎となる流れは本事業の成果である弥生時代の新年代観であることは言うまでもなく，一般の人にそのことを理解してもらう上で有効な手段である．ただ，フォーラムでの発表記録，という性格から，専門的な立場からの専門的な報文が散見され，全体的なテーマの中での位置付けが明確でなかったり，専門外のひとにわかりやすく，平易に，という点でこなれていないものもあり，本書出版の目的からは残念な面もある．

Ⅴ．　総合評価と今後の課題

１．　3 つの評価の視点からの評価

1）歴博の設置目的からの視点

本研究事業は，歴博の設置目的である「我が国の歴史資料，考古資料の収集」の一環としての「年代測定資料（及びそのデータ）の収集」であり，「歴史学，考古学および民俗学に関する調査研究」の基盤を形成するものである．そして，それらの結果を正しく歴史年表に位置づけた結果を図書の出版，展示，報道など，様々な手段を用いて一般に公開し，市民教育を実践したもので，設置目的に正に叶う活動であったと大いに評価できる．

2）歴博が大学と異なる研究機関であるという視点からの評価

歴博固有の研究資材の投入と自然系・考古系・歴史系各分野の研究者が一体となって継続して事業を推進してきたもので，このような組織的研究事業の推進は大学の学部・研究科等では極めて難しいことで，正に歴博だからできた事業と大いに評価される．

3）（国公立の）研究所と異なる研究機関であるという視点からの評価

歴博での研究は単一プロジェクトではなく，継続的な，しかも全国的な規模での資料収集・研究・公開が基本にあり，研究者自身もそれを職務として従事してきている．これは一つ一つのプロジェクトをこなして行く研究所では長期的に継続して取り組むことは困難であり，正に歴博が担っている目的に叶う事業であると評価される．

２．　個別の評価項目と評価内容

1）研究体制

・歴博内の共同研究体制

本研究事業は歴博として年代測定を専門とする研究を配置し，研究環境をある程度整え，そこに考古学分野，歴史学分野の研究者が協働して行ったから実現できたもので，館内で

の共同研究が極めて良好かつ円滑に行われたことによって多大な成果を挙げたものであり，十分に評価される．

・歴博外との共同研究体制

本事業は本館内の欠けた分野を補完する外部研究者との共同研究という面と，全国の遺跡調査を実践し，出土遺物の管理・研究を担っている多くの考古学研究者との行動研究という二面性を持っているが，特に後者において良好な状態で多くの協力と共同研究者の参画が得られたことが成功の秘訣であり，その研究体制を実現したことは高く評価される．

2）本研究の成果の評価

・AMS 年代測定法を考古資料にどのように適用すべきかの方法論を確立したこと．

・測定試料の徹底的な吟味と測定値に正当な暦年補正を施したことにより放射性炭素による年代測定が土器などによる考古編年と決して矛盾しないことを明らかにし，さらに「2000 年問題」を年輪年代の結果を援用することにより，ほとんど解決した．

・弥生時代開始時期を従来の考古学的編年（相対年代）による見積もり値から大幅に遡った年代を提案し，弥生時代のみならず縄文時代の年代観，大陸，特に中国と日本との関係を根本的に見直した歴史観の創成を強く求める基礎を提供した．

本事業の成果は以上に留まらないが，これらを以てしても本研究事業の成果は非常に大きなものであり，この一連の研究の展開は高く評価されるものである．

3）外部資金導入

本研究の事業費は歴博独自の予算と外部資金により手当てされており，外部資金の主たるものは文部科学省（及び学術振興会）による科学研究費補助金である．この 12 年間で，7 件，総額が 37,210 万円を獲得しており，件数は少ないものの，その規模は十分に評価される．

4）研究成果の公開，普及

本事業に関連した研究成果は，1）歴博の刊行物（年報，研究報告，展示図録），2）歴博の研究及び公開シンポジウム等の開催，3）歴博の企画展開催，4）科学研究費等の研究成果報告書，5）学術創成研究ニュースレター「弥生農耕の起源と東アジア」，6）関連諸学会，研究会，シンポジウムなどでの発表，7）各種学術雑誌，8）各地の遺跡発掘調査報告書等，9）専門書による研究成果の発表，10）一般書による市民への公表，など実に多岐にわたり，又非常に多くの報告がなされている．学術分野での論文数（特に英語論文がないこと）などでやや難点があるが，他の手段による成果の公開，普及は十二分になされていると言え，評価できる．

３.今後の課題

歴博における年代研究と年代測定システムの確立がここまで来た上では，次に大きな課

題を掲げ，更なる展開を図ることが強く望まれる．評価者が歴博に期待する今後の課題は次のようなものがある．

1）日本における較正年代曲線（JCAL）の確立．これが最終目標である．そこに至るためには様々な研究の展開が必要だが，特に次の二つがある．

2）縄文時代の年代測定試料・データの更なる蓄積．弥生時代の年代測定数に比べ縄文時代ではまだまだ測定密度が低い為，考古学的編年との整合性の検討，画期の設定には不十分である．質の高い資料に基づく測定値の増加が強く望まれる．

3）年輪年代学研究推進の奨励あるいは歴博における推進．日本では考古資料と対比される樹木年輪標準暦は奈良文化財研究所にしかなく，それ以外のどの研究機関・研究者にもない．そのため樹木年輪の暦年決定は単一の研究機関で行われることによりクロスチェックができない状態にある．JCAL の作成にはそこが最終的な致命的欠陥になる可能性が高い．歴博と奈文研，さらに全国の樹木年輪研究者によびかけ，それらの協働により，そこを解消し，オープンにクロスチェックできる体制を歴博として提案し，実現，推進することが必須だろう．

⑵2007.6.12⑵